チャールズ・ディケンズにみる19世紀中期のイギリス紳士社会の実態と変容
―不確かな出自と可変的な気質に関する考察―

The Reality and Transformation of British Gentleman Society in Mid-19th Century through the Works of Charles Dickens: An Examination of its Uncertain Origins and Fluctuating Nature

内屋敷　強
Tsuyoshi UCHIYASHIKI

要　旨

19世紀中期から、多くの人々が階級上昇を目論み、紳士になることを切望した。フランスの哲学者ボードリヤールが後に「シミュラークル」と呼ぶ現象、すなわち、紳士の模倣でありながら、その模倣元となる「本物」が存在しない状態が顕著になった。成り上がり者たちは、紳士の教養を身に付け、溶け込もうとするが、自身の出自と気質を否応なく意識し、苦悩する。『大いなる遺産』の主人公ピップは、エステラとの階級差に苦しみ、自分の血筋（blood）が卑しく、気質（nature）が労働者のそれであることに悩む。遺産相続により紳士となったピップは、ロンドンの紳士が彼と同様に出自の怪しい者たちであることを知り、出自や血筋にこだわることの無意味さと、気質が変化しうることを実感する。本論文では、ピップの冒険譚が作家ディケンズの貧しい幼少期から大作家への成功譚と呼応していることを指摘し、資本主義社会を生き抜く19世紀の人々を鮮やかに描き出したと論じる。

＜キーワード＞: 階級、出自、気質、紳士、オリジナルなきコピー

1．はじめに

ディケンズ作『大いなる遺産』（*Great Expectations*）は、主人公ピップの遺産を巡る冒険譚という大きなプロットが主軸にある一方で、エステラなどピップ以外の登場人物の出自を探る冒険譚がサブプロット―場合によれば、物語においてメインのプロット以上に大きなうねりを作り出す―として存在する。ピップがエステラの秘密である彼女の父親の正体を弁護士ジャガーズに明かした後、ピップが心情を吐露する。以下多少長くなるが、本論の趣旨に関わるため、引用する。

> But I could not submit to be thrown off in that way, and I made a passionate, almost an indignant appeal to him [Mr. Jaggers] to be more frank and manly with me. I reminded him of the false hopes into which I had lapsed, the length of time they had lasted, and the discovery I had made: and I hinted at the danger that weighed upon my spirits. I represented myself as being surely worthy of some little confidence from him, in return for the confidence I had just now imparted. I said that I did not blame him, or suspect him, or mistrust him, but I wanted assurance of the truth from him. And if he asked me why I wanted it and why I thought I had any right to it, I would tell him, little as he cared for such poor dreams, that I had loved Estella dearly and long, and that although I had lost her and must live bereaved life, whatever concerned her was still nearer and dearer to me than anything else in the world. (415-16、下線部筆者)

孤児であり、暴力的な姉に虐待に近い状態で育ったピップにとって、ルーツやアイデンティティを探ることは何よりも彼の欲することである。労働者階級の身であったピップは町の醸造所で上品に振舞うエステラに対し、羨望のまなざしと恋焦がれる気持ちを抱くのであるが、そのエステラも豈図らんや、出自を辿れば、どこの馬の骨とも知れない犯罪者にして脱獄者マグウィッチと、ジプシーで気性の荒い女モリーを父母に持つことを知り愕然とする。上の引用では、心から愛しているエステラだからこそ、彼女の出自の秘密の真偽のほどをはっきりさせたいとピップは吐露しているのである。それに対してジャガーズは以下のようにピップに答える。

> 'For whose sake would you reveal the secret? – For the father's? I think he would not be much the better for the mother. For the mother's? I think if she had done such a deed she would be safer where she was. For the daughter's? I think it would hardly serve her, to establish her parentage for the information of her husband, and to drag her back to disgrace, after an escape of twenty years, pretty secure to last for life.

> But, add the case that you had loved her, Pip, and had made her the subject of those “poor dreams” which have, at one time or another, been in the heads of more men than you think likely, ... (418-19、下線部筆者)

ジャガーズはピップが言うエステラの秘密を暴くことでだれが利を得るのか、と問う。この20年という歳月を隔てて、エステラ、マグウィッチ、モリーはそれぞれの人生をばらばらに歩んできたのであり、彼らの出自は現在の生活に善用されるどころか、場合によれば、悪意を持ってみられる可能性さえある。このジャガーズの出自の秘密に対する考え方は『大いなる遺産』を通じ、重要な意味を持つ。というのは、後述するように、『大いなる遺産』が書かれた19世紀中葉のヴィクトリア朝全盛期では、産業革命の結果、中世以来の固定的、閉鎖的な身分社会が徐々に崩れ、階級間移動が盛んになった時代であり、貴族も労働者も知識人階級もその出自は非常に疑わしいものになった。とりわけ労働者などの下級の階級の人が、貴族、専門職などの上流階級に上昇した場合、彼らは自分の出自やそれを象徴的に著す言葉遣いや服装、交友関係などを隠して、上流特有の品位(respectability)を身に付け、紳士然として振舞うことを要求される。ここで一つの問いが立ち現れてくる。すなわち、彼ら成り上がり者は本当の意味で、紳士なのか、労働者であった人が紳士へと変貌する過程において、彼らには出自に対する劣等感や葛藤は生じなかったのか、という問いである。

『大いなる遺産』では、後に詳述するように、登場人物の「血」(blood)と「気質」(nature)の違いを明確に言及している。すなわち、よい血筋(blood)を持っている家系に生まれることと、よい気質(nature)を持った人間として生まれることは別問題であるということである。さらに敷衍するならば、血はどんな人であっても変えることができない運命的なものであるのに対し、気質はその人の努力により変え得る後天的なものである、という点で、前述の問いとも関係してくる。すなわち、「紳士」という身分は、あらかじめ高貴な血統を持った人に生まれ備わった先祖代々受け継ぐようなものなのか、それとも全くそのような血筋を持っていない人が、努力をしたり、真似をしたりすることで、獲得できるようなものなのか、ということである。結論を少し急げば、ヴィクトリア朝という特異な時代においては、紳士の持つ排他的で高貴なイメージである道徳的な高潔さや礼儀作法その他のエッセンスを少しでもまねて、限りなく紳士に近づくことがしばしば多くの者にとっての願望として語られ、そして彼らが、社会の「現実」を作り上げた。すなわち、確固たるそれまでの血統がものをいう時代は終わり、抽象的で実体のつかみにくい気質なる

もの、あるいは品位という言葉が表す紳士然とした何か、に何とか実体を与え、それを獲得しようと個人個人が躍起になり、そんな烏合の衆が社会の本質になっていった。そこでは、ヴィクトリア朝時代特有の「階級」社会が鍵になる。

産業革命と資本主義社会を経験した結果、身分社会が崩壊し、新たに階級社会が到来した。すなわち、中世以来、血縁、地縁を前提とした固定的な身分社会は崩壊し、経済的な生産によって階級が自覚される時代になった。サミュエル・スマイルズ（Samuel Smiles）の『自助』（*Self-Help*）に代表されるように、個人の努力次第では、社会的地位の上昇をもくろむことが現実的になりつつあり、それまで大土地所有と血統・血筋を前提にした貴族が没落していった。言いかえれば、上流階級にとって必須だった「どこの家系の生まれか」という血統意識の重要性は薄れ、見かけ上の服装、話し方、教養などを通じ、「紳士風」に見えることが重要視された時代だったと言える。貴族という血統が明確なものに代わり、怪しげな「コピー、模造」としての紳士まがいの人々が濫立し、しまいにはそのコピーが社会そのものを作り上げてしまう時代となった。また、下級の階級の者が、上流の作法を真似る俗物根性（snobbery）が横行し、その結果、逆説的ではあるが、個人個人が自分の出自に懊悩する時代ともなっていった。そんな19世紀イギリス社会にしばしばみられる「出生の秘密」は格好の小説のテーマとなった。前述したように、19世紀は産業革命で人々が資本を蓄積し、階級を「金で買う」ことができるようになった一つの帰結として、自分自身の生まれ、起源、アイデンティティが曖昧になった。そのため19世紀イギリスの小説では、主人公や周辺の登場人物の出生が謎として設定され物語が進行するにつれて徐々に解明されるというプロットを取ることが多い。『大いなる遺産』では、本章の冒頭に引用したように、ピップが、恋するエステラ（Estella）の出自の謎を解くことがひとつのプロットとなっている。同時にピップは、自分自身の労働者としての出自に常に煩悶しながらも、（似非も含めた）紳士のいるロンドン社交界に解けこもうとする。エステラの出自の秘密を知ってもなお、恋焦がれその激情に溺れるピップは、一方で、親友であるハーバートに資金援助をし、彼の出世を手助けしたり、あるいは、教養もあり、高潔だが出世という観点からは浮かばれない、マシュー・ポケットの評価を押し上げるなど、ひそかに紳士然たる振舞いを身につけた。ピップは、自分自身の労働者としての出自に終生悩まされるが、それでも、その地位に甘んじることなく、最終的には、大金持ちにはならなかったが、商社の事務員という職を得るに至った。自身の出自に懊悩しつつも階級上昇をやめず、絶えず紳士に憧れるピップは、19世紀ヴィクトリア朝時代を生き抜いた作者ディケンズそのものなのだ。労働

者から階級移動をしようと、紳士階級に何とか適応しようとする過程で、自分の血＝出自に意識的にならざるを得ないが、決して厭世的にならず、社会の頂点まで上り詰めてやろう、という楽観的で野心に満ち溢れた若者をディケンズは描こうとした。ディケンズは『荒涼館』の中で、進歩的な勢いとしての「動いている時代」(“moving age”) に共感し、中期ヴィクトリア朝時代の衰退し伝統に縛られた「永遠の停滞」(“perpetual stoppage”) に反対した。彼の生きた社会には確かに紳士まがいの人物が闊歩していたし、彼らが社会を作り上げたが、その現象に真っ向から反対するのではなく、それ自体を包摂し、生き生きと描こうとする作家ディケンズの姿がそこにあった。

２．ヴィクトリア朝中期の社会―階級移動と成り上がり紳士が跋扈する時代

イギリスの19世紀ヴィクトリア朝時代は、ヴィクトリア女王の治世の始まる1831年から1901年までを指す。70年余りの時代をしばしば1870年代で大きく二分する研究が存在する。前半部分である1830年代から70年代は、労働運動の衰亡と工業化の推進の時代であったと言える。1830年代から40年代にかけて、チャーティスト運動や穀物法撤廃など労働者の権利を求める運動が展開されたが、その間工業化の進展により、富が上流・中流階級から労働者階級へと次第に行き渡り、経済は大いに発展した。その結果、労働者が経済的に豊かになり、地主を中心とした旧来の統治者による体制に取り込まれ、労働運動は下火になった。地主による政治体制は強化され、他方で熟練労働者を中心に地位・名誉を求める運動が盛んになった。1859年にはサミュエル・スマイルズによる『自助』が出版され、熟練労働者の間で、節約・勤勉に徹し経済的な独立を遂げ、紳士を目指す倫理観が広まった。

本論では、『大いなる遺産』が出版された時代の前後である、1860年代に焦点を当てたい。前述したように、中流および上流階級を中心とした政治体制は堅固なものとなり、労働者階級は体制に取り込まれつつあった。これにより、とりわけ熟練労働者は社会の根本的な改革や革命を志向するのではなく、中流および上流階級の価値観に同調し、階級上昇を目指す志向が強まった。彼らは、自分たちは労働者とは違い、上流階級特有の品位や作法、教養を模倣したり、取り入ろうとする。この中・上流階級に特有の品位はヴィクトリア朝時代において、自らの社会的地位向上のために積極的に取り入れられた。これは個人の社会的地位向上のためにも用いられたし、各種の職業集団が自らの地位を押し上げるために用いられた。重要なのは、彼らがよりどころとする紳士階級と言われる国教会聖職者や貴族の基準に自らを合わせ、社会的な信用を勝ち得ていたことである。彼らは、聖職者その

ものにはなれないが、紳士が身に付ける教養をパブリックスクールに通って身に付けたり、あるいは節約・励行をし、一代で資産を築くなどして、社会的な信用を獲得した。もちろん、彼らの地道な努力は美談として推奨されるが、同時に紳士の持つイメージが先行してしまうのも事実である。『大いなる遺産』では、その紳士の持つイメージ、例えば、有閑階級で自由に使える資産を多額に持っていることを、遺産が転がり込むという設定の中に生かしたと言えよう。

ロンドンを中心とした大都市では、そのような成り上がり紳士であふれていた。前述した由緒正しい血統の貴族が支配する体制から、怪しげな出自を持つ「成り上がり」紳士が社会を動かす時代になったと言える。ジャン・ボードリヤール風に言えば、「オリジナルなき」紳士の「コピー」が跋扈し、彼らが社会を動かしつつある時代となっていたのだ。

3.「血」と「気質」に関する問題

ピップは、『大いなる遺産』第44章において、ミス・ハヴィシャムに親友のハーバート並びにその父であるマシューのポケット一家をその莫大な資金によって支援してほしいと頼み込む。もともと、マシューはミス・ハヴィシャムに耳の痛い忠告をしたことで、彼女は彼を敬遠していた。彼女が生前決して会うことはない、と明言していたくらい嫌悪していたのであるが、ピップはポケット一家の高潔さを説き、他の親族と「気質」が全く異なると主張する、'They may of the same blood, but believe me, they are not of the same nature' (364, 下線部筆者)。この場合の「血」とは、「血筋」とか「血統」などの言葉に代表される、先祖からの高貴な（もしくは下賤な）つながりである。また、'nature' は「人間の気質、本質」などを表す単語である。従って、ピップは血(blood)と気質(nature)は違う、言いかえれば、「血」が高貴であっても、性悪な人物になるし、逆も真である、と主張しているのである。また同章の別の場面で、エステラがベントリー・ドラムルと結婚すると聞いたとき、ピップとエステラが以下のようなやり取りをする。

> [Pip] I thought and hoped you could not mean it. You, so young, untried, and beautiful, Estella! Surely it is not in Nature!
> [Estella] 'It is in my Nature,' she returned. .... It is in the nature formed within me. (366, 下線部筆者)

エステラにとって、ドラムルのような醜悪で性悪な男と結婚することは、その「気質」にふさわしくない、と主張するピップに対し、それこそが私を形成した「気質」そのものだと主張し、双方の溝は深まる。ピップが望ましいと考える「気質」とエステラ自身の「気質」に差があることも興味深いが、この問題は後の章で詳述する。『大いなる遺産』を貫く一つの大きなテーマ、すなわち、階級社会において「血」と「気質」（人間性、内面の清らかさなどに相当する）はそれぞれの階級特有のものを有していなければいけないのか、あるいはそれらは階級を超えてより普遍的なものなのか、という問題を示している。第３章では、紳士社会に溶け込もうとし、自身の労働者としての「血」と「気質」と紳士階級のそれらとの双方で揺らぐピップの苦悶について考察する。ここで、「気質」に関して参考になるのが、シェイクスピアの描く「気質」に対する世界観である。シェイクスピアの作品ではしばしば、女性が男性に扮し、通常の異性同士の恋愛関係をずらして見せる。『お気に召すまま』（*As You Like It*）では、公爵の娘で、今はアーデンの森に身を隠すロザリンドは、自ら男装し、ギャニミードという森番として生きることを選ぶ。ロザリンドは、公爵お抱えの力士との相撲で見事相手をなぎ倒したオーランドーに恋をしており、オーランドーも彼女に好意を寄せる。森で偶然オーランドーとロザリンドは出会うが、オーランドーは、男装しているロザリンドを彼女だと認識できず、男だと思い込む。一方ロザリンドは自分の正体を明かさず、オーランドーに、自分をロザリンドと思ってくどく練習をするようにと提案し、二人は摩訶不思議な疑似恋愛関係を結ぶ。結局ロザリンドは自らの魔術により、オーランドーの前に本物のロザリンドを出すと言い、その他三組のカップルが同時に婚礼を結ぶ、というドタバタの喜劇で幕を閉じる。ここで重要なのは、人間に「気質」（nature）なるものが本当に存在するのか、ということである。すなわち、同書に登場する貴族ジェイキスがいみじくも独白しているように、「全世界が一つの舞台、そこでは男女を問わぬ、人間は全て役者に過ぎない、退場があって、登場があって、一人が自分の出番にいろいろな役を演じる」（‘All the world’ s stage, / And all the men and women merely players,/ They have their existence, / And one man in his time plays many parts....’）のであり、シェイクスピアは「男と女」、「田舎者と貴族」、「道化と公爵」のような人間の役割さえ転換させ、どのように振舞うのか実験している。人間自体に固有の気質が存在するのではなく、役割を着せることで、それに見合うのように人間は振舞い、順応し、やがてその役割があたかも自分のアイデンティティそのものであるかのように、馴染んでくる。本論の主題は、まさにこの点であり、ディケンズが『大いなる遺産』で描いた似非紳士もその役割をまとい、

ときに自身の血と気質の間で葛藤しながらも、その世界に馴染もうとしたということだ。

ピップ（Pip）という名前＝出自という問題

ピップは、その名前を冒頭で以下のように紹介している。

> My father's family name being Pirrip, and my Christian name Philip, my infant tongue could make of both names nothing longer or more explicit than Pip. So, I called myself Pip, and came to be called Pip.（1）

『大いなる遺産』において、「ピップ」という名前の持つ意味は大きい。後にピップが遺産を相続する際の条件として、「ピップと名乗り続けなければいけない」(第18章)と弁護士ジャガーズ氏から言われることにも表れているように、この「名前」とその「出自」は深く関係している。また、ピップは他の登場人物からその名前で呼ばれたり、名前ではなく、エステラからは「坊や」、マグウィッチからは「わが子」、ハーバートからは「ヘンデル」と呼ばれる。それらの呼称はピップの周りからの認知のされ方を反映していると言えよう。ディケンズは他の作品においても登場人物に印象的な名前を付けていること（象徴的命名法を手法として用いていること）を考えると、『大いなる遺産』における「ピップ」(Pip)という名前にも何らかの意味を付与したことは容易に想像できる。

pipには種子、種という意味があり、また小さな鳥がピヨピヨと鳴く様子をその発音から連想させることから、Pipの生まれたての赤ん坊のような「無垢さ」を暗示していると言える。付け加えれば、Pipは[p]の破裂音であり、その音は、人が不満を表す際、唾を吐く音（「ペッ」という音）を連想させる（実際英語で、「唾を吐く」は 'spit' という単語であり、やはり[p]音が含まれていることに注意したい)。ローマン・ヤーコブソンは、『失語症と言語学』などの著作で、幼児が言語をどのように獲得するのか、ということを論じているが、子供が最初に話す言葉には、“mama” や “papa” のように、母音[a]が含まれており、両方の唇を調音点とする[p]や[m]の音が表れるという。'Pip' には[p]音が二つ含まれており、その音から、ピップの稚拙さ、精神的未熟さを表そうとした作者ディケンズの意図が垣間見える。

ここまでで、'Pip' は、「無垢さ」という象徴的な意味を付与されている一方で、否応なくネガティブな意味が含まれていると考えざるをえない。'Pip' という名は、労働者階級出身という卑しい出自を烙印として作者ディケンズが主人公に付与した一種の装置である。

親友でもありよき父親の役割を持っていたジョーからは、最初、親しげに「ピップ」、「ジョー」とやり取りする仲であったが、ひとたびピップが紳士になると、ジョーの呼びかけは「サー」(Sir) と変化してしまい、ピップはその呼ばれ方を嫌っている（第57章)。また、田舎の幼馴染のビディは「ミスター・ピップ」と呼び、それを連呼するビディに警告を発している（第35章)。故郷を同じくする人からは、「ピップ」と親しみを持って呼ばれることを希望するピップだが、ロンドンでできた親友ハーバートがあえて「ヘンデル」(Hendel) と呼び名を変えたのは、その「田舎臭さ」を感じ取り、回避する意図があったからだ。以上で確認したように、ピップはその名前から彼の労働者としての出自＝生まれ＝血を背負っている。

紳士になりたい労働者階級ピップの苦悩

ピップが労働者であることは、『大いなる遺産』ではその名前のほか、言葉遣いとその「手」に象徴的に示されている。最もわかりやすい例としては、第8章で、ピップが初めてミス・ハヴィシャムの邸宅、サティス・ハウスに行ったとき、ミス・ハヴィシャムがエステラにピップと遊んでいると、彼女は以下のように言う。'He calls the knaves, Jacks, this boy!' said Estella with disdain, before our first game was out, 'And what coarse hands he has! And what thick boots!' (63) この言葉を受けて、ピップは自分自身の労働者としての出自を思い知り、苦悶する。

> .... and deeply revolving that I was a common labouring boy; that my hands were coarse; that my boots were thick; that I had fallen into a despicable habit of calling knaves Jacks; that I was much more ignorant than I had conceived myself last night, and generally that I was in a low-lived bad way. (68、下線部筆者)

ミス・ハヴィシャムおよびエステラとの出会いは、ピップに自らの出自を相対化させる契機となったのと同時に「あんな上品で気品のある人に育ちたい」という羨望のまなざしを強くする。第17章では、幼馴染のビディとの会話では次のように発言する。

> 'Biddy,' said I, with some severity, 'I have particular reasons for wanting to be a gentleman. ... "Biddy,' I exclaimed, impatiently, 'I am not at all happy

> as I am. I am disgusted with my calling and with my life. I have never taken to either since I was bound. Don't be absurd.（131、下線部筆者）

上記のように啖呵を切るピップは現状に決して満足しておらず、潜在的に「紳士」になることを渇望していた。それでもピップの心には揺らぎがあり、ピップは、以下のようにも吐露する。

> I began to consider whether I was not more naturally and wholesomely situated, after all, in these circumstances, than playing beggar my neighbour by candlelight in the room with the stopped clocks and being despised by Estella.（134、下線部筆者）

上述の引用の 'these circumstances' とは、故郷で幼なじみであるビディと夏の夕暮れに一緒に散歩している状況を指している。ここにも、自分の労働者としての出自と、それを抜け出し、上昇することの苦悩を感じているピップが立ち現れる。彼の中には、前述したように、元来労働者であることに甘んじることなく、上昇しようという意識が内在していたことも間違いないだろう。それはきっかけとしては、エステラという令嬢に会い、自分の労働者としてのみじめさをまざまざと見せつけられて、奮起しようと思い立ったこともある。しかしながら、故郷への郷愁も並々ならぬものがあり、自分自身が場違いな存在であり、高貴な身分の人とはふさわしくはないという自己嫌悪に陥っている様子が、まるで 'candlelight' の光であぶりだされているようである。ピップが比較しているのは、高貴なエステラとトランプ遊びに興じる自分と、沼地という故郷で幼なじみのビディと話している自分である。ピップにとって、自分自身の労働者の血は、自身を取り巻く環境である、故郷の沼地やそこに住む家族のようなつながりにまで拡張されて表象されている。そんな環境と縁を完全に断ち切り、紳士に上り詰めることができるのかという彼の不安心理を描写しているともいえよう。いずれにせよ、ピップは自分の労働者＝沼地出身というアイデンティティを最後まで拭い去ることはできない。彼の社会における実体のある地位とは、沼地での生身の人間関係を通して自然と生じた鍛冶屋の見習い＝ピップという一労働者である。しかしながら、この後ロンドンで築くのは金の力を使って作り上げる虚飾まみれの、紳士同志のいわば偽りの人間関係である。このピップの居心地の悪さは、実体から離れて、

偽紳士のうごめくコピーの中に身をうずめようとするひとりの青年の不安心理であり、おそらく作者ディケンズが作家としてデビューした後の感覚に近いものがあるだろう。ディケンズは父親の借金のために幼少期に靴墨工場で働くという極貧に近い生活をしており、作家としてデビューし華やかな生活を送った後も彼の書く作品の中にその記憶は決して失われてはいない。拭い去りたい過去のトラウマではあるが、それなしでは、自分のアイデンティティの存亡にかかわる重要な核である。ディケンズとピップの異なる点は、ピップは自ら運命を切り開いたわけではなく、遺産が転がり込むという偶発的な出来事により、突如金持ちになることだが、いずれにせよここでは、ピップの声を借りてディケンズ自身の出自に対する複雑な思いを語っていると言えよう。

ピップの周りの偽紳士たち

ピップは遺産を受け取った後、ロンドンでの社交界のデビューを果たし、順当に紳士に解けこもうとする。しかし、先述した「血」を巡るピップ自身の煩悶もあり、この章で検討するピップの「気質」にも紳士階級の一員でいるためには問題があることを指摘する。

ことをこのピップの「気質」とはピップの田舎出身ゆえの純粋さ、素朴さ、と言い換えることができる。本論冒頭の第1章に引用したように、ジャガーズは、ピップの問いかけ対し、エステラの秘密を暴露することが誰のためになるのか、と切り返す。ジャガーズにとって、エステラやマグウィッチの出自の怪しさはすべて折り込みずみだったのであり、ピップのように、どこまでも白日のものとすることを是としない。

本論文冒頭に引用したピップの心の叫びは、どこから生じるのだろうか。一つは、彼がロンドンに上京してから、浪費をしてクラブに出入りしたり、調度品を置いたりして、様々な虚飾を凝らして紳士として社会に溶け込もうとしたが、エステラに対する気持ちは本心から生じたものであることの証左といえる。心から愛する対象であるからこそ、その人の秘密を残さず知りたいと考える。しかしその秘密を握っているはずの弁護士ジャガーズからは肩透かしを食らい、真実を知ることのむなしさを逆に説かれる。コピーの紳士としてデビューしたピップにとって「オリジナル」を探ることは無意味であり、仮にそのことを知っていたとしても、見せかけの高貴なる社会においては不要なのである。また、ピップを取り巻く人々もかなり出自＝オリジナルが疑わしい。弁護士ジャガーズはまだ無名であったころにエステラの母親であるモリーの弁護を担当しているが、その弁舌は、陪審員を手玉に取るための論理のすり替えがなされており、彼の操る言葉さえもその真偽のほどは定か

ではない。また、ジャガーズ自身も、自らの社会的地位を高めるべく、資産家のミス・ハヴィシャムに近づき、その弁護を請け負い、名を馳せている。ピップの目を通して描かれるジャガーズは人格的にはとても高潔には描かれておらず、仕事上必要な論理の一貫性を重視するため情に流されない冷徹な男として描かれている。仕事のためには倫理観さえも重視せず、犯罪者であるマグウィッチの依頼さえも拒まない。そんな彼の身の上の話は彼自身から直接話されるわけではなく、助手のウェミックを通じて語られる。そんなウェミックもまた、自宅には虚飾の橋を架け、老父と二人暮らしの奇妙な生活を送っている。同じく虚飾の紳士という衣を着たピップには、ロンドンで生活をするこれらの紳士がどこまで行っても嘘で塗り固められており、そんな真実＝オリジナルを暴くことの無意味さを突き付けられている。

激情に走るピップ―出自に隠された皮肉とそれを乗り越えるピップ

ピップは遺産を受け取ることをジャガーズから知らされたとき、二つの条件を飲むことになる。一つは、先述したように、‘Pip’ という名前を名乗り続けること、そして、二つ目に支援者の名前はその本人が明かしたいと思うまで、秘密扱いとなる、というものだ。前者の条件は、ピップが遺産により紳士になるものの、その名前に刻まれた出自＝労働者という階級意識が重要なカギになることを暗示する。また、後者の条件は、物語の中盤まで明かされることがないことから、ピップの目線で、読者をその謎解きに誘うという点で、小説にミステリーの様相を含ませている。実は後者の条件である、支援者は誰かという問いを考えるヒントは物語の中にちりばめられており、ピップがそれに気づかないことで支援者がミス・ハヴィシャムだと勘違いしてしまう。実は第10章でピップの故郷である沼地の居酒屋の謎めいた男が、新しいシリング硬貨をしわくちゃの一ポンド札二枚で包んでいたのだが、ピップはロンドンに上京後、故郷に戻る途中の馬車の中で、その謎めいた男に再会する（第28章）。その男がもう一人の男に以下のように一ポンド札二枚を手にした理由を説明する。

> ‘So he says,’ resumed the convict I had recognized – ‘it was all said and done in half a minute, behind a pile of timber in the Dockyard- “You’re a-going to be discharged!” Yes, I was. Would I find out that boy that had fed him and kep his secret, and give him them two one pound notes?

Yes I would. And I did.’（233）

ピップも男の会話を漏れ聞いており、上記の引用の下線部 ‘boy that had fed him and kep his secret’ はピップ自身のことであり、マグウィッチ（このときピップはその名前は知らない）がピップに今も関わりを持とうとしていることを推論できたはずである。しかし、この会話でピップはマグウィッチと関係のある男だとはわからず、マグウィッチの口から聞くまでは、遺産の支援者はミス・ハヴィシャムだと思い込んでいる。エステラへの激情ともいうべき執着心を持つあまり、理性的な判断ができなかった。以下の独白は多少長めになるが、ピップの心情の告白は本論では重要であるので、引用する。

> The lady whom I had never seen before, lifted up her eyes and looked archly at me, and then I saw that the eyes were Estella’s eyes. But she was so much changed, was so much more beautiful, so much more womanly, in all things winning admiration had made such wonderful advance, that I seemed to have made none. I fancied, as I looked at her, that I slipped hopelessly back into the coarse and common boy again. O the sense of distance and disparity that came upon me, and the inaccessibility that came about her! .... Proud and wilful as of old, she brought those qualities into such subjection to her beauty that it was impossible and out of nature – or I thought so – to separate them from her beauty. Truly it was impossible to dissociate her presence from all those wretched hankerings after money and gentility that had disturbed my boyhood- from all those ill-regulated aspirations that had first made me ashamed of home and Joe .... (239-40)

ピップにとって、エステラは常に惨めな労働者の子ども時代を思い起こさせるきっかけであり、金や品位を身に付けたいという上昇志向のきっかけともなっている。同時に、ピップにとって、エステラはひれ伏してでも慕いたいという絶対的な女神として映っている。一方、ピップにとって、紳士になることは、外圧的な欲望であった。それはまさにルネ・ジラールの言うところの模倣欲求である。

> われわれが観察した一切の欲望の中では、単に対象と主体があるだけではなかった。第三の項、一度だけわたしが優越性を与えようと試みることができたように思う競争相手が存在していたのである。.... 主体は、競争者がそれを欲望するが故にその対象を欲望するのである。競争相手が何らかの対象を欲望することによって主体に、望ましいものとしてその対象を支持するのである。(228- 29)

つまり紳士になることは、ピップにとって、「みんなが欲しい」から目指すものであり、それ故、打算的であり、偽善的でさえある。実際、ピップは田舎を捨て、労働者に甘んじるジョーを軽んじ、そして自らをも欺く。

> All other swindlers upon earth are nothing to the self-swindlers, and with such pretenses did I cheat myself. Surely a curious thing that I should innocently take a bad half-crown of somebody else's manufacture, is reasonable enough; but that I should knowingly reckon the spurious coin of my own make, as good money! (229、下線部筆者)

上記の引用におけるbad half-crown（偽の半クラウン硬貨）は自らを偽り、紳士と騙っているピップその人であろう。金・階級・品位と引き換えに自分の出自を騙るピップである。しかしながら、エステラに対する思慕は、純粋な「私が欲しい」という欲望ではなかったか。ハーバートとの会話では、遺産の相続の条件にエステラとの結婚が含まれていないというハーバートの冷静な指摘に対しても、エステラから離れられないと、その思いを強くする。また、エステラへの近づきがたさに身もだえしつつも、ますます離れられず、支援者が自らとエステラを結びつけるという気持ちを固くする。ピップは、彼自身の感情をこう説明する。'[B]ut the inaccessibility which her beauty and her manner gave her, tormented me in the midst of delight, and at the height of the assurance I felt that our patroness had chosen us for one another. Wretched boy!' (243) . マグウィッチが遺産の支援者であることが分かった後、彼は自らの過ちを認め、以下のようにミス・ハヴィシャムにも誤解をさせた要因があると指摘する。

> I should have this sooner, but for my long mistake, it induced me to hope that Miss Havisham meant us for one another. ... It would have been cruel in Miss Havisham, horribly cruel, to practice on the susceptibility of poor boy, and to torture me through all these years with a vain hope and an idle pursuit, if she had reflected on the gravity of what she did. (365)

ピップにとって、エステラとの結婚は望みであり、期待（expectations）であったのだ。それは遺産（expectations）により、紳士に階級を上げ、上流階級の仲間入りを果たすことで、成し遂げることができるものだった。しかし、それは、うぬぼれた願望（vain hope）であり、無意味な追求（idle pursuit）に終わってしまった。これは紳士になり、何もかも手に入ると考えていたピップにとってはエステラとの関係は皮肉な結末で終わったと言える。しかしながら、ピップの描いていたエステラはそもそも夢想に過ぎない理想像だった。というのも、エステラはマグウィッチとモリーの子であり、その気性は元来激しいものである。エステラの結婚相手は、ドラムルという醜男にして、オーリックのような残忍さを持ち合わせた暴力的な男であったし、エステラは、ピップの慎み深さよりむしろ、その暴力性に好意的に反応する（第11章）。ピップの追い求めていたエステラ＝高貴なるものという図式がそもそも成り立ちのしない絵空事だったという皮肉である。ではディケンズはこのような欲望に突き動かされたピップを苦々しく描いているのか、と言うとそうとも言い切れないところがある。最終章、第58章では、ずいぶんと時間が経過して、エステラとピップは偶然かつてあったサティス・ハウスで出会う。エステラは次のようにピップに言う。‘[W]hen suffering has been stronger than all other teaching, and has taught me to understand what your heart used to be, I have been bent and broken but – I hope – into a better shape. Be as considerate and good to me as you were, and tell me we are friends.’ (490) . エステラはピップの苦悩を理解していたし、エステラ自身も捻じ曲げ、押しつぶされていた（bent and broken）ことを認めている。そのような青年期の体験を‘better shape’「よりよい形」になるための必要悪と捉えていることからも、欲望に突き動かされ、紳士になろうとしたピップの存在そのものを決して悲観的に見ているわけではないことが分かる。この姿勢はディケンズの人生観にも重なる部分がある。ディケンズが『大いなる遺産』を執筆していたのは、自身が50歳手前になるころであった。ディケンズ自身が自分の作家人生を振り返り、がむしゃらにその世界で生き抜こうと、踏ん張った姿はピップのそれと重なるし、『大いなる遺産』の語り手が過去を回想している形式そのものから、

語り手＝ディケンズと位置づけて差し支えないだろう。遺産は霧消するし、結婚もできないという不本意な結末ではあるが、その結末以上に、そのような人生を送ったピップ＝ディケンズ自身を楽観的に見ている語り手の暖かさを感じることができる。

4. 結論

ピップは、遺産を失ったが、決して元の木阿弥の労働者に戻ったわけではなかった。ピップは、エステラの出自がマグウィッチとモリーの子であることを突き止める。ミス・ハヴィシャムは火事が原因で、亡くなってしまう。その遺産の大半は、エステラのもとに入ったが、ピップの働きかけにより、マシュー・ポケットにもその一部が相続されることになった。ピップは、ハーバートの勤めるクラリカー商会の中東支店に11年間勤務することになり、彼自身は労働者として逆戻りすることはなかった。

ピップは、遺産を受け取る出来事を通じ、この世界の、もっと言えば資本主義社会の成り立ち、根源そのものを探ったのではなかろうか。例えば 'respectability' なるものは、具体的で、触れることのできるものではなく、つかみどころのない、もやもやしたものだっただろう。このピップの冒険譚は、ピップ個人特有の事象ではない。ピップをはじめとした、資本主義社会を生きる無数の人々の心の冒険でもあったはずだ。すなわち、金の力により、階級を上げ、紳士然とした品位を醸しつつも、社会で生き抜くために、自分自身の卑しい出自を偽り、こびへつらう人々にとって、唯一確実に制御できるのは、自分自身の気質（nature）である。「制御できる」という言葉で表すのは、自らの心のおもむくままに＝真心によって、自分自身で変えることができる、ということであり、決してこれらは、偽ることのできないものである。従って、例えば金の力によって仮初に得た紳士という身分から陥落したとしても、そのエッセンスである身に付けた作法や教養、知識は決して消えずにその人の滋養になり、それまでとは異なる人生を送ることを可能にする。ここで、ジョージ・バーナード・ショー（George Barnard Shaw）の書いた『ピグマリオン』（*Pygmalion*）の一節を紹介したい。『ピグマリオン』は、ヒギンズ博士と、ピカリング大佐の指導により、一介の花売り娘に過ぎなかったイライザ・ドゥーリトルを立派なレディに仕立て上げるという物語である。この物語でとりわけ重要なのは、言葉遣いである。下町の訛りを矯正し、社交界でも通用できるようになったイライザは、最終的にはヒギンズ博士の求婚をはねのけ、フレディという青年との結婚を選ぶのであるが、本論と関わりのあるのは、ヒギンズ博士を振り払う際、彼女が言うセリフである。「学んだことが身についてしまって。もう昔

のような言い方は、ひと言だって言おうたって言えません。」(“Not now. Never again. I have learnt my lesson. I don’t believe I could utter one of the old sounds if I tried.”)「一度教えた知識を取り上げることはできないの」(“You can’t take away the knowledge you gave me.”) イライザは、働くことのできない紳士のフレディに代わって、自らが体得した言語的な知識を伝授しながら、生活をしようというのである。彼女は決して、花売り娘ではない。確かに生まれ=血は労働者のそれかもしれないが、彼女の人生は、それを超えている。同様にピップはオリジナル（＝紳士）を模倣したが、同時に自分の気質を磨いて真の自分を作り出し、「紳士」と一括りにされない何者かになった。ピップに代表されるこのようなオリジナルなきコピーが現実社会に放り込まれ、そして社会を形作るさまは、赤貧の状況から自分の才覚一つで大作家としてのし上がったディケンズその人である。何者でもない青年が書いた作品がヒットし、その作品が人々の共感を呼び、作品そのものが世論や世界を形成していくのだ。資本主義社会という浮き沈みが激しく、運不運も大いに左右する時代であっても、世界を疎んじるのではなく、悲喜交々すべて包摂し、少しスパイスのきいた皮肉を織り交ぜつつ、全体としては持ち前の楽観さをもって執筆したディケンズの姿が浮かび上がってくる。

【参考文献】

Crossick, Geoffery. “The Emergence of the Lower Middle Class in Britain : A Discussion”. *The Lower Middle Class in Britain 1870- 1914* , edited by Geoffery Crossick, Routledge, 2016, pp. 11-60.

Dickens, Charles. *Great Expectations*. 2024, Penguin Books.

Gilmour, Robin. “Introduction: The Idea of a Gentleman”. *The Idea of the Gentleman in the Victorian Novel*, Routledge, 2016, pp.1-15

---. “The Mid-Century Context”. *The Idea of the Gentleman in the Victorian Novel*, Routledge, 2016, pp.84-104.

---. “Dickens and Great Expectations”. *The Idea of the Gentleman in the Victorian Novel*, Routledge, 2016, pp.105-148

Paroissien, David. *The Companion to Greta Expectations*. Helm Information, 2000.

Shihada, Isam. "Capitalism in Charles Dickens’s *Great Expectations*: A Critique". *International Journal of English: Literature, Language & Skills*, vol. 6, no. 1, 2017, pp. 42-52.

Sterms, Ami, E and Burns, Thomas, J. “About the Human Condition in the works of Dickens and Marx”. *CLCWeb: Comparative Literature and Culture.*, vol. 13, no. 4, Purdue University Press, 2011.

新井潤美.『<英国紳士>の生態学 ことばから暮らしまで』. 講談社, 2020.

ヴェーバー, マックス.『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』. 岩波書店, 大塚久雄訳, 1992.

榎本洋.「紳士に投資する―『大いなる遺産』における投機行為について―」.『愛知県立大学外国語学部紀要』, 第43号, 2011, pp.18-42.

君塚直隆.『教養としてのイギリス貴族入門』.新潮社, 2024.

西條隆雄, 他編.『ディケンズ鑑賞大事典』. 南雲堂, 2007.

ジラール, ルネ.『暴力と聖なるもの』. 法政大学出版局, 2010, 古田幸男訳.

藤井晶宏.「『大いなる遺産』―ディケンズの描いた紳士とは―」.『人文論究』, 第43巻, 第3号, 関西学院大学人文学会, 1993, pp. 100-112.

ボードリヤール, ジャン.『シミュラークルとシミュレーション』. 法政大学出版局, 2010.

松村昌家.「アイロニーの構造」.『『大いなる遺産』―読みと解釈』, 松村昌家編, 英宝社, pp.3-34, 1998.

村岡健次.『ヴィクトリア時代の政治と社会』. ミネルヴァ書房, 1970.

---.『近代イギリスの社会と文化』. ミネルヴァ書房, 2002.

村上幸大郎.「結末から見直す『大いなる遺産』」. Zephyr, 京都大学大学院英文学研究会, 2010, pp.52-71.

ヤーコブソン, ロマーン.『一般言語学』. みすず書房, 1976.

---.『失語症と言語学』. 岩波書店, 1976.